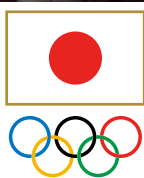


Newsletter #4

北海道・札幌 2030 ニュースレター | 第 4 号

第 5 回北海道・札幌 2030 オリンピック・パラリンピックプロモーション委員会



北海道・札幌

冬季オリンピック・
パラリンピック
の招致を目指しています



写真 / 「スカイランタンイベント」
(2022 年 10 月 22 日実施)

発行：札幌市・公益財団法人日本オリンピック委員会
発行日：2022 年 11 月 17 日

世界が驚く、冬にしよう。

北海道・札幌 2030 大会招致スローガンが決定

北海道・札幌 2030 オリンピック・パラリンピックの招致スローガンが『世界が驚く、冬にしよう。』に決定しました。

10月27日に札幌市で行われた発表会見では、はじめに北海道・札幌2030オリンピック・パラリンピックプロモーション委員会招致スローガン策定ワーキンググループの木村麻子座長がスローガン策定の過程を説明しました。ワーキンググループは10名で構成され、9月から全4回のミーティングを実施。その中で議論された意見を踏まえ、「変わっていく、変えていく姿勢を伝える」「クリーンな大会を目指すことを伝える」「主体的な関わりや参画を促す姿勢を伝える」「大会開催でもたらされるレガシーにより、まちが変わっていくことを伝える」の4つをスローガン案作成の視点として検討が行われ、以下の3案が最終候補となりました。

A案：世界が驚く、冬にしよう。

B案：NAMARA 熱い！真っ白な舞台へ

C案：未来のために、いま変えよう。

この最終候補3案について10月4日～10月17日にかけてインターネット応募企画を実施。郵送、FAXなども含めた応募総数は1万5,726件となりました。その後、ワーキンググループでの確認を経て、最も支持の多かった『世界が驚く、冬にしよう。』がプロモーション委員会、招致スローガンとして決定しました。



決定したスローガンに関して、木村座長



は「北海道・札幌の持つ魅力、ポテンシャルを存分に発揮し、新しい展開、新しい未来をみんなで作っていくという前向きな思いを込めたものとなりました。未来に向かってみんなが一つになり、明るい希望を持って一步を踏み出すための後押しとしてくれるようなスローガンができたのではないかと思います」と説明。そして、若い世代を代表してワーキンググループに参加した大学生の鎌田優月さん（札幌市まちづくり若者実行委員会委員）が、「誰も見たことがないような、新しいオリンピック・パラリンピックで、世界中の人々を驚かせたい。天然雪に恵まれた舞台から生まれる、アスリートたちの卓越したパフォーマンス。地球を守り、自然と美しく調和する、これからの都市と暮らしの在りかた。あらゆる違いを尊重し、認め合う社会。これらを実現し、世界と分かち合う。これまでの常識を超えたオリンピック・パラリンピックに、みんなで挑戦し、ともに作りあげていきます。」と、スローガンに込められた思いを紹介しました。

また、同じく大学生として参加した毛利迅さん（札幌市まちづくり若者実行委員会委員）は「札幌から皆さんを、そして世界を驚かせるようなオリンピック・パラリンピックになればいいと思います」、浅野悠

さん（学生向け2030大会ワークショップ参加者）は「スポーツの力、札幌市民・北海道民・日本国民の力、加えて環境面などみんなの力を合わせて、ワクワクするようなオリンピック・パラリンピックをつくっていければと思います」と、スローガンに込めた思いを話しました。

続いて、招致スローガンを用いた北海道・札幌2030大会の新しいキービジュアルを発表。青から赤へのグラデーションが印象的なキービジュアルの前に、ワーキンググループメンバーであり北海道・札幌2030オリンピック・パラリンピック招致応援大使を務める永瀬充委員は「すごく力強くてインパクトがあって驚きましたし、グラデーションで多様性も表現されている。プロモーション委員会で目指してきたものが反映されていると感じました。スローガンをきっかけに、スポーツを通じて世界中の人々を驚かせていくことを皆さんと一緒にやってつくりあげていきたい」、同じく原田雅彦委員は「ここに若者たちの思い、札幌市の未来が詰まっていると感じました。スポーツには心を動かす強いメッセージもあります。その思いをこのスローガンに込めて、もう一度気を引き締めて頑張っていきたいと思います」と、あらためて北海道・札幌2030大会招致へ向けた意気込みを述べました。

Interview

招致スローガン策定ワーキンググループ

木村麻子座長

プロモーション委員会委員と大学生ら若い世代と一緒に作り上げたこのスローガンの策定の経緯や言葉に込められた思いなどを、招致スローガン策定ワーキンググループの木村麻子座長に伺いました。

――10月27日に北海道・札幌2030大会の招致スローガン『世界が驚く、冬にしよう。』が発表されました。ワーキンググループメンバーの意見をまとめていくうえで心掛けたことを教えてください。

やはり多様性というものをしっかりと表現したいという思いがあり、ワーキンググループ自体も多様性を意識したグループを作っていました。特に今回は若い世代の人たちにもたくさん入っていただいたので、若者たちが話しやすい雰囲気、安心して考えを話していただけるような空気作りを心掛けていました。プロモーション委員会のメンバーはオリンピック、パラリンピアン、また経済界などの方たちも含めて本当に専門家集団。でも、専門家だけで考えてしまうと、どうしても考えが偏り、生活と理想とでかけ離れてしまうこともあると思います。ですので、若い方たちや多様性に富んだ小さなグループでギュッと凝縮して、すごく話しやすい雰囲気で意見交換をさせていただいていたと思います。

――学生たちの力、意見はどのような役割を果たしましたか。また、木村座長ご自身は学生たちの考えについてどのような感想を持ちましたか？

やはり学生さん、若い世代の方たちは物事

に対してとらわれていないんですよね。シンプルに北海道・札幌のこういうところが好き、こういうところを誇らしく思っている、こういうところがよく分からない、といった意見を正直に出してくれます。オリンピック・パラリンピックの招致はただのスポーツの祭典ではなく、人を育てて街をつくって未来をつくる“未来創造プロジェクト”なんだと、原点に帰らせていただくような気づきがたくさんありました。

――学生たちも含めたチームでの一連の活動を経験し、座長として改めて感じたことはどのようなことでしょうか？

この招致を目指している北海道・札幌2030大会は、本当に変えていこうという決意を持った大会なのだと感じています。オールジャパンでスポーツ、まちづくり、経済、教育などあらゆるジャンルの人たちが理想に向かって一緒に尊重し合いながら、作りあげて生まれたこの招致スローガンはまだまだ小さな一つだと思うのですが、こういうことの繰り返しがこのオリンピック・パラリンピック招致の本当の意義だと非常に感じています。

――『世界が驚く、冬にしよう。』という招致スローガンに込められた意味、木村座長が込めている思いをお聞かせください。

『世界が驚く、冬にしよう。』というのは、ワーキンググループで作成した最終候補案3つの中の1つだったわけですが、市民、道民、国民の皆さまの応募で支持してくださる声が多かったです。では、なぜこのスローガ



ンに支持が集まったのかと言いますと、やはり希望を感じるから、そして『冬にしよう。』という部分は「一緒にやっぺいこう」というメッセージ性が強いからだと思っています。ですので、北海道・札幌2030大会は「みんなでやろうよ！」という思いを私自身は持っています。このスローガンがみんなの合言葉、心の真ん中にある共通の思いとして、ワクワクするような希望を持つ起爆剤のようなものになってくれたらなと思います。

――それでは最後に、札幌市のまちづくりなども含めて北海道・札幌2030大会に期待していることを教えてください。

若い世代の人たちには今があることに対する感謝と、自分たちがこれからの未来をつくっていくんだという気概と希望を、このオリンピック・パラリンピックを通じて生み出してほしいなと思っています。そして、日本がより豊かになっていくために、札幌が持続可能で多様性に富んだモデルになるような街になっていたらと思います。それは過程でもいい。すべて完ぺきになることはないと思いますので、札幌がそういう方向のモデル都市になり、世界が驚いてまた見に来る人を連れてくる、つながりたくなるような街になっていたら、とても素晴らしいなと思っています。



第5回プロモーション委員会

10月27日、札幌市内で第5回北海道・札幌オリンピック・パラリンピックプロモーション委員会が開催され、会場とオンライン合わせて26名が出席。これまで4回にわたり「共生社会」「レガシー」「SDGs」「経済・まちづくり」をテーマに議論を重ねてきたことを踏まえ、今回は大会開催意義の取りまとめと今後の活用について、並びに招致スローガン決定に関する報告と意見交換が行われました。

議題に入る前にスポーツ庁長官である室伏広治顧問が、東京2020大会組織委員会の元理事が受託収賄容疑で逮捕された事案について、改めて「危機感を持って重く受け止める必要がある」と述べるとともに、10月17日に開かれた『スポーツ政策の推進に関する円卓会議』で取りまとめられた決議などについて説明。その上で、組織運営のあり方等に関して「スポーツ庁として、2030年北海道・札幌大会をはじめ、大規模な国際競技大会の円滑な開催に向けて関係団体と連携協力していきたいと考えております」と決意を述べました。

また、円卓会議に出席した日本オリンピック委員会（JOC）会長である山下泰裕会長代行は、今後の方針に関して「11月の半ばをめどにスポーツ団体、弁護士、公認会計士等の専門家、札幌市をはじめ今後予定されている国際競技大会関係者等にもご協力いただきながら、検討を開始したいと考えております」と説明。札幌市長である秋元克広会長代行もクリーンな大会の取り組みに向けて「札幌市としても積極的に参画をして、JOC等と連携をしながら透明性、公正性の高い組織運営の実現に向けた検討をしっかりと進めていきたい」と述べました。

次に「大会開催意義の取りまとめと今後の活用」について、事務局より説明が行われました。第1回～第4回会議で議

論された各委員の意見を整理したものとして、「大会開催意義の取りまとめ」を作成。その中に、開催意義のポイントを分かりやすく発信するための大会コンセプトとして、環境・共生社会・変革をテーマに3つにまとめたことが報告されました。そして、「大会開催意義の取りまとめ」の今後の活用に関して、11月公表予定の「大会概要（案）更新版」など現在の取り組みに速やかに反映されるほか、開催地決定後は大会組織委員会での計画や運営、札幌市のまちづくり計画などにも反映していくことが述べられました。

続いて、「まちづくり戦略ビジョン」に基づいて札幌市が作成した、目指すべき都市像をまとめた映像を秋元会長代行が紹介。これは「ユニバーサル（共生）」、「ウェルネス（健康）」、「スマート（快適・先端）」の3つを重要概念のキーワードとして作成され、秋元会長代行は「まちづくりを加速化させるための一つのきっかけとして、将来のまちの姿、戦略ビジョンで目指すまちの姿を多くの人と共有できればと考えています」と映像に込められた思いを述べました。

また、機運醸成活動について、札幌市内や東京都内で行われた各種イベント等でのPR、都市装飾の展開などを事務局が説明。若い世代を対象にしたワークショップは8月から計17回実施して延べ375名が参加し、ここで得られた意見は「100のアイデア」として「大会概要（案）更新版」に盛り込まれることも報告されました。

最後に招致スローガンについて、検討経過とともにインターネット応募企画の結果を踏まえてワーキンググループでは最終案を「世界が驚く、冬にしよう。」と決定したことを報告。これについて各プロモーション委員が承認し、招致スローガンに決定しました。

松田丈志 JOC アスリート委員長ら札幌市の中学校で「森林と SDGs」について講演

日本オリンピック委員会（JOC）アスリート委員会の松田丈志委員長、高橋成美委員、三宅宏実委員が10月20日、北海道・札幌市の西岡中学校を訪問。「SDGsについて森林を通して考えよう」をテーマに講演しました。本講演は、オリンピックやスポーツができる環境を守るためには自然環境保全が重要であり、オリンピックを切り口としてSDGsについて考えることを目的に実施されました。

はじめに松田委員長が『JOC Vision 2064』の中にSDGs活動の推進（地球温暖化や頻発する自然災害の課題解決に取り組む）が掲げられていることや、東京2020大会で実施したSDGsの取り組みである「都市鉱山から作るメダルプロジェクト」「PETリサイクル表彰台」「施設建設資材として木材を活用し、持続可能な木材調達の基準を設けた」ことなどを紹介しました。

次に、森林に関するクイズ「日本の森にはどれだけの生き物が暮らしている？（答え：90,000種類）」「山から木がなくなると起きやすい災害は？（答え：土砂崩れ）」「森がなくなると魚が少なくなる？（答え：○）」やアニメVTRで、森林が果たす役割について生徒と一っしょに学習。これらの内容を踏まえ、松田委員長は森林の多面的機能である「水源かん養」「防災・減災」「レジャー・いやし」「地球環境保全」「生物多様性保全」「木材・食料の生産」を説明するとともに、「木

は使って育てるサイクルを伸ばしていくことが大事。世界中では木がたくさん切られています。日本では逆に使う量が減っている。森林は、木が多すぎると日光が行き届かず、全体に悪影響が及ぶこともある。木材をもっとうまく活用して、元気な森を日本に増やしていこうという取り組みが今、行われています」と、日本の森林の現状を補足しました。

続いて、これまでの森林の役割についての理解をさらに深めるために、SDGs実現のために森林を通して私たちができることは何か、についてアスリート委員、生徒が一っしょになって考えました。まず、松田委員長が身近なものとして「毎日5杯は飲むぐらい好き」というコーヒーを例に挙げて説明。一つのコーヒー豆を栽培するために森林破壊、地球温暖化、農薬による健康被害、生態系への悪影響、過酷な労働環境などを招く恐れがあること、それらを防ぐ一つの方法としてフェアトレード（公正貿易）によって雇用・環境を守ることにつながることから、松田委員長は生徒たちに向けて「たった一つのコーヒー豆からSDGsや森とのつながりを考え、みんなのアクションを変えていくことで地球を守り、SDGsの実現につながっていく可能性があります」と伝えました。

そして、中学生にとってより身近なものであり、原料が木材であるノートを通じて

SDGs実現のためにできることを生徒同士が考え、話し合い、意見を共有。自ら手を挙げて登壇した生徒たちは「再生紙のノートを使用して無駄をなくす」「最初から最後まで無駄なく使う」「できるだけ一つのものを大事に使う」「リサイクルできるノートを使う」「何かを書く以外の使い方も考える」など、自分たちができるSDGsについて発表しました。

最後に、森林を通してSDGsを考えた今回の講演を総括して、高橋委員は「一つのテーマ、問題についてみんなで考え、工夫して頑張ることは、私たちがやってきたスポーツも同じですごく楽しいことです。だから、みなさんも楽しみながら環境問題について考えるという遊びをしてみてください」、三宅委員は「私自身、環境について学ぶ機会にもなりました。今は検索すればたくさんの情報がありますので、みなさんも環境について調べたことを今後の知識として次につなげてくれればと思います」とメッセージ。水不足で競泳の大会が中止になった経験が環境の大切さを知るきっかけになったと明かした松田委員長は「みんながやっているスポーツや習い事も何かしら環境に紐づいていると思います。SDGsは世界中が目指している実現したい社会。みんなもその一員なので、ぜひ身近なところから考えていってほしいなと思います」と呼びかけて講演を締めくくりました。



「No Maps 2022」 オリンピアンが冬季スポーツの未来についてディスカッション



北海道札幌市で開催されたクリエイティブコンベンション「No Maps 2022」で10月20日、日本オリンピック委員会と冬季産業再生機構によるカンファレンス「SAVE THE SNOW ～be active～プロジェクト オリンピアンが見据える冬季産業の未来とは」が行われました。オリンピックの松田丈志さん、太田雄貴さん、皆川賢太郎さん、上村愛子さん、原田雅彦さんが参加し、スポーツと冬季産業、環境の問題についてアスリートの視点から意見を交わしました。

皆川さんの進行のもと、地球温暖化と雪の影響について上村さんは「20年くらい前から欧州の氷河のかさが目に見えて減ってきている。欧州の寒い地域でも雪が降らなくなってきて大変なことになっている」と発言。「だからこそ、北海道をはじめ東北、新潟、長野など日本の降雪地域における質・量を含めた「雪資源」の貴重さを改めて実感している」と続け、「日本の雪の降り方は世界的にも大切に、稀に見る雪国大国という立ち位置なのかなと思う」と報告しました。

そうした貴重な「雪資源」を今後、スポーツ産業や観光ビジネスなどでどう生かすかに関して太田さんは「地球温暖化で札幌の希少性が増す中、環境と経済成長の折り合いをつけられるような新しいまちづくりを目指すのか、それとも過去にもあったリゾートホテルを数多く建築するような短期回収でいくのがポイント。札幌がどういう方向性を目指すのか興味を持って見ています」と提言。また、松田さんも、「世界的にSDGsの観点から最適化していこうという中で、札幌や日本の雪資源を生かしたまちづくりをどうやっていくのか考える余地はたくさんある。日本の雪資源が世界的にもそれほど希少なのであれば、なおさら太田さんが言うように大事に取り組むことでチャンスが出てくる」と述べました。

そして、招致を目指している北海道・札幌2030大会について「僕は支持派。様々な要因があったとしても、資源の保有国としての役割がある」と皆川さん。これを受けて、北海道・札幌2030オリンピック・パラリンピック招致応援大使でもある原田さんも「1972年の札幌オリンピックから50年経ち、札幌も生まれ変わろうとしている。雪と共存してきた札幌市が未来の子どもたちのためにさらに成長するために、このオリンピック・パラリンピックがきっかけになればいい。スキーのニーズも変わって遊び方も変わっている。時代の変化に遅れないようにしたい」

と、北海道・札幌2030大会を契機とした新たなまちづくりに期待を寄せました。

最後に「スポーツの未来」について、それぞれ思い描く姿を意見にまとめ、カンファレンスを締めくくりました。

「オリンピックも今、存続のための過渡期にある。開催地側も過去の慣例を踏襲するのではなく、新しい提案をする勇氣が必要」（太田さん）

「オリンピックは時代とともに変わるべき。スポーツがその時代の市場規模に最適化すれば良く、必要でなければ淘汰される。過剰に投資されるのではなく適切にやっていけばいいと思う」（松田さん）



「オリンピックはかけがえのない時間だったが、ポジティブな意見ばかりではなく、時代に合わせて変わらなければいけない。もし北海道・札幌2030大会が開催されたら喜んで応援したい。ただ、開催した後何事も変わっていないのではもったいない。雪と街が近い札幌だからこそこういう形ができたという、次の提案になる大会になることを願っています」（上村さん）

「雪やバリアフリーなど北海道、札幌が抱える問題はたくさんあり、今のままではダメだとみんな分かっている。だからこそ、常識にとらわれない勇氣を札幌市民と一緒に持って一歩を踏み出し、札幌2030大会を成功させたい。雪は財産。札幌市と雪との共存を世界中にアピールしたい」（原田さん）





JOC アスリート委員らオリンピック 8 名が北海道で植林活動

日本オリンピック委員会（JOC）と冬季産業再生機構は 10 月 21 日、スポーツを通じた社会貢献活動の一環として北海道 上川郡美瑛町で植林活動を行いました。

JOC は「JOC Vision 2064」に基づき、各ステークホルダーとともにスポーツを通じた社会課題の解決の貢献に取り組んでいます。また、JOC アスリート委員会と冬季産業再生機構は北海道・札幌 2030 オリンピック・パラリンピック招致を契機に、地球温暖化や気候変動に伴う雪資源保全を含めた環境問題、環境保全の重要性、環境保全とスポーツ、オリンピックの関係を多くの方に身近に感じていただくことを目的に共同プロジェクトを実施。前日の 10 月 20 日にはオリンピックが札幌市の西岡中学校を訪問し「森林を通じた SDGs」について講演、また札幌市主催のイベント「No Maps 2022」に参加し「冬季スポー

ツの未来と環境」についてトークセッションを行いました。

植林には JOC アスリート委員会の松田丈志委員長、太田雄貴委員、小口貴久委員、高橋成美委員、寺尾悟委員、三宅宏実委員、冬季産業再生機構の皆川賢太郎代表理事、同機構でアンバサダーを務める上村愛子さんの 8 人のオリンピックが参加。2 人 1 組となって植林作業を行い、1 人が土をスコップで掘り返し、もう 1 人が掘り返した穴の中に約 4 ～ 50cm の苗木を植えていきました。

当日は天候が良く、10 月中旬ながら暖かい日差しが降り注いだことから、オリンピックたちは途中から TEAM JAPAN の半そで T シャツ姿で植林を実施。持ち前の運動神経を発揮してどんどんと苗木を植えていき、楽しみながら約 500 本のグイマツを植林しました。



松田丈志委員長

2030 年に向けた SDGs は世界中の人が今考えていることだと思いますが、我々スポーツ界、JOC としてもやはり共通の課題。その課題解決に向けて具体的にアクションを起こしていこうと、今回この植林活動を行いました。今日植えた木が 50 年後に一つの森として完成するというので、1 日 2 日ではなく長いスパンで考えなければいけないのが環境問題であり、今日少しでも貢献できたら嬉しいと思います。また、我々が率先していくことで次世代のアスリートや子供たちに環境の大切さが伝わっていけばいいと思います。

寺尾悟委員

過去に長野でオリンピック・パラリンピックを開催していますが、大会を迎えるということはある意味、環境にものすごく負担がかかる可能性もあります。それをいかに減らして、且つ、見ていただける皆さんの心に何か響いてほしいなと思いますので、今回の植林やこれからの活動がその一助になればと思っています。

太田雄貴委員

体を動かすことで世の中のためになると思うとすごく良かったです。僕らが当たり前のようにしている生活や活動は木を切ったり、環境を破壊して成り立っているのだと知ることができたり、その象徴的なものがオリンピックだと思います。また、オリンピックだけではなく、普段の練習などでも環境に寄り添って活動するという思いを大事にしていきたい。

三宅宏実委員

環境がないとスポーツは絶対にできませんし、共存していくものだと思います。今日の植林活動などを通じて環境を大切にし、スポーツの可能性も高めていながら、これからも自分自身ができることをやっていきたいなと思います。

小口貴久委員

植林を実際にやってみると大変さも感じましたが、やはり楽しかったですし、こうした作業が大事だということを改めて感じました。現役時代は競技をできることが当たり前だと思っていましたが、その裏側には環境があり、そこを大事にしていかなければいけない。これから子どもたち、アスリートたちとも環境について一緒に考えていくことができればと思います。

皆川賢太郎さん

隣には 50 年前に切った切り株があり、そこにまた新しい苗木を植えていくという作業に携わらせてもらい、自分たちも 50 年後のことを考えるタイミングにもなりました。一方で、アスリートとしてできることにも結び付いて、非常に充実した時間でした。JOC アスリート委員会と一緒に選手たちができることはすごく声を届けること。自分たちが活動することで共感と動機付けになってくれたらと思います。

高橋成美委員

苗木を 1 本植えていくことは小さな活動だと思いますが、その一つひとつも始めなければ何も変わっていきなないと思います。つまずくとサイクルはそこで終わってしまうので、こうした活動をやり続けていくことが大切だということをメッセージとして伝えたいです。

上村愛子さん

私たちが日ごろ活動しているスキー場は木を伐採して作られたもので、もう営業をやめてしまったスキー場などの木を切ってしまったところはもう大きな木がなかなか育たないという現状もあります。スキーヤーとして植林をしたいと思っていても行動に移せなかった中で、初めて体験させていただいて素敵な時間でした。

「From TOKYO2020」大学生にインタビューしました

学生によるフォーラム「From TOKYO2020 ～学生がつなぐ未来へのバトン～」が10月8日、上智大学四谷キャンパスで開催されました。本フォーラムでは、オリンピック・パラリンピックに関わる団体に所属する学生たちが、活動を通して得た経験や課題、オリンピック・パラリンピックが社会にもたらす変化などについてトークセッションを実施。会場の参加者やオンライン視聴者からも様々な質問が寄せられて活発に意見交換を行うなど、若い世代の目を通してオリンピック・パラリンピックと未来の社会を考える場となりました。

フォーラム終了後には、トークセッションに登壇した学生たちにインタビューを実施。自身が考える北海道・札幌2030大会との関わり方、オリンピック・パラリンピックを通して次世代に伝えたいこと、また、自国開催の意義や北海道・札幌2030大会に期待することなどを聞きました。



あゆさわ せいじ

鮎澤誠二さん（From TOKYO2020 学生実行委員会委員長）

――北海道・札幌2030大会が開催されたら、どのような活動・関わり方をしたいですか？

東京2020大会では大会の目的を自分が考えるような立場だったので、北海道・札幌2030大会では大会の目的について問いかけるような立場になりたいと思いました。他の学生たちと一緒に活動していく中で「大会の目的って何なんだろう？」と疑問を持って、逆に関わらなくなった学生もいましたし、そうした学生を見ていく中で、やはり大会の目的意識をちゃんと持ったうえで開催することがすごく大事だと感じました。なぜ北海道・札幌2030大会を開催するのかということについて、自分から問いかけて、より多くの人たちに考えてもらうことをやっていきたいと思います。

――オリンピック・パラリンピックを通して得た学び、経験を、次の世代にどのように伝えたいですか？

オリンピック・パラリンピックを通じて、自分と異なる考え方や立場の人を理解し、それらを受け入れて自分の中で解釈する姿勢がすごく大事だということを学んだと思います。団体の活動においても、自分は他の学生たちとは違うよ

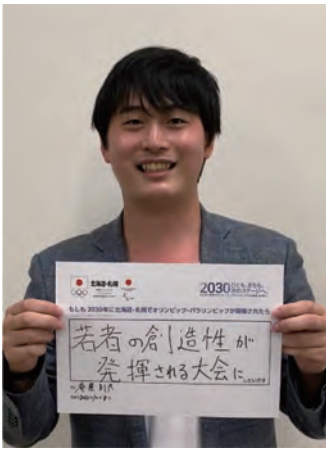
うなバックグラウンドを持っていたので、考え方がぶつかったり、疑問を持つような機会もありました。でも、そうした考え方の違う学生と関わっていく中で、自分の視野がすごく狭かったなと思い知らされたり、なぜその人がそう思っているのかと考えるようになったのはすごく大きな学びだったなと思います。もちろん、何でもかんでも受け入れようということではなく、自分というものもありながら、他の考えを理解しようとする姿勢というのは、日常生活ですごく生かされること。生きていく中で絶対に自分とは違う考え方にぶつかることがあると思いますので、そうした時にどういう考え方、スタンスが取れるだろうかということを、ぜひオリンピック・パラリンピックを通して学んでほしいなと思います。

――自国でオリンピック・パラリンピックが開催されることの意義、また北海道・札幌2030大会への期待は？

ひと言で言うと、その場のノリとかで学生や若い人たちが大会に関わりやすいことが自国開催のメリットかなと思います。東京2020大会に関わった学生の中には2024年パリ大会でボランティアをしたいと思っている学生もいると思



ますが、フランス語が必要といった様々なハードルがあると思います。でも、自国開催だったら自分が話す言語で大丈夫ですし、例えば家から1時間くらいの距離でボランティアができるという関わり方ができるのはすごく大きなメリットかなと思います。特に若い人たちにとっては経済力もそこまで高くはないので、若い世代を巻き込むためには自国開催は大きな価値がある。また、誰もが自分の意見を発することをあまり怖がらずに、自分の考え方を体現するというのが、北海道・札幌オリンピック・パラリンピックを通じて実現できるようになると、社会がすごく良い循環をしていくのではないかなと思います。



つづき のりひこ
都築則彦さん（学生団体おりがみ）

僕は2014年に今やっている学生団体を立ち上げたので、東京2020大会組織委員会と同じ時期ぐらいに学生団体を作りました。そこからずっと活動してきているのですが、他大学のオリンピック・パラリンピックに関する授業を受けに行ったり、JOA（日本オリンピックアカデミー）の学会に参加したり、論文を読んだり、自分から学びに行くアクティブラーニングをしてきました。ですので、机の上で学ぶことだけではなく、自分から考え、参加しに行くことによって学べる事であると思います。そのような姿勢を伝えていきたいですし、そこから時代の最先端、節目に立つという感覚を学生に伝えていけるような取り組みをしていきたいと思っています。

——自国でオリンピック・パラリンピックが開催されることの意義、また北海道・札幌2030大会への期待は

やはり企画側に回れる可能性があるということでは圧倒的に自国開催のメリットだと思っています。その意味でも僕は自分がやっているボランティア活動と合わせていきたいですし、オリンピック・パラリンピックをどうやって使っていくかという企画目線を味わえるところが一番

だと思います。また、オリンピズムという理念が日本の社会の中で本当に達成されているのかという差分をとれることに価値があると思います。ジェンダー、LGBTQ、人種、障がいなどいろいろな問題があると思いますが、オリンピズムと照らし合わせるとここが足りないという考え方ができるという意味で、日本社会の文化を変えることができる。ここがオリパラを自国で開催する最大の意義だと思いますし、それを学生たちが自分の頭で考えていくことに価値があると思っています。つまり、オリンピズムという共通言語を持ちながら、平和、共生社会などの理念をみんなで考えていけることがオリパラの自国開催の意義かなと思っています。

また、北海道・札幌2030大会に向けて思っていることは、オリパラに対してネガティブなことがあったからといって、それで全部ダメだったとしてはいけないと思っています。どんなオリパラがあるといいかな、あるいはどんなオリパラだったら嫌だなと考えることがすごく意義のあることだと思います。招致に対して無関心でいるよりは、どうすればいいかと考えることを北海道・札幌2030大会に向けた活動としてやっていきたいです。

——北海道・札幌2030大会が開催されたら、どのような活動・関わり方をしたいですか？

オリンピック・パラリンピックに学生・若者が参画できるようなコーディネーターになりたいと思っています。いろいろな若者が自分の持っている想像力が発揮されるような大会にしていけるために意見をくみ取ったり、コーチングをしていながら組織委員会や行政の企画と合わせていくような役割りを担えるように頑張りたいと思っています。

——オリンピック・パラリンピックを通して得た学び、経験を、次の世代にどのように伝えたいですか？

ひび まきこ
日比麻記子さん（元 MG オリンピック・パラリンピックプロジェクト実行委員会）

——北海道・札幌2030大会が開催されたら、どのような活動・関わり方をしたいですか？

私は活動の中で東京2020大会組織委員会との関わりもあり、次の社会を担っていけるこの世代として関わるのができたのは貴重な経験だったと思います。ですので、2030年に北海道・札幌オリンピック・パラリンピックが開催されたら、今度は自分が組織委員会に入って、東京2020大会で良かった点を引き継ぎつつも、学生の目線でもう少しこういうことができたのではないのかなということを今度は自分が関わる中で実現できたらいいなと思っています。そして、学生・若い世代をもっと取り込んで、もっと主体的に活動してもらって、また、せっかくお金と労力をかけて招致するのだったらオリパラの良さを還元したいと思っているので、地域創生などを通じてより多くの日本人、外国人を巻き込んで盛り上げていきたい。そうしたムーブメントを、自分が組織委員会の中でやっていけたらいいなと思っています。

——オリンピック・パラリンピックを通して得

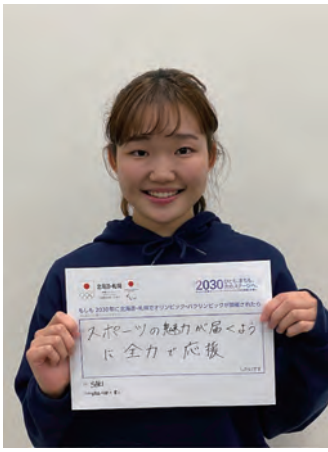
た学び、経験を、次の世代にどのように伝えたいですか？

いろいろな関わり方があるということがオリンピック・パラリンピックの一つの良いところで、アスリート、ボランティア、観客など、大会が開催されると現場に合わせた関わり方ができると思います。やはり海外で大会が開催されてもなかなか現地に行くのもハードルが高いと思うので、地元の開催地として居合わせることで自分が貴重な経験。いろいろな関わり方の中で自分の方法を見出してほしい。また、私自身はオリパラ教育をギリギリで受けられなかった世代で、むしろ自分が提供する側だったのですが、オリンピック・パラリンピックに関連してパラスポーツの魅力、共生社会の大切さを伝えられるきっかけでもあると思いますので、それらをしっかり次世代に伝えていけたらと思います。

——自国でオリンピック・パラリンピックが開催されることの意義、また北海道・札幌2030大会への期待は？



世界規模、地球規模で開催するオリンピック・パラリンピックという大イベントが地元、自国に来ること自体が一番の魅力と思っています。東京2020大会では外国人の方と関わるのが実現しづらかったのですが、北海道・札幌2030大会ではぜひ外国人との関わりができればいいなと思っています。それこそが自国開催の意義なのかなと思います。また、開催国にいるのに世界規模のイベントを目の前で見ることができるという恩恵を受けないのはすごくもったいないと思うので、一人でも多くの人がある恩恵を受け取ることができればと思っています。



なるしま さき

鳴島沙紀さん（上智大学 Go Beyond）

なったからこそ、私ができる範囲で周りの人たちへどんどんつなげていける活動を、2030 年に向けても、またその後に向けても継続的にしていけたらと思っています。

——オリンピック・パラリンピックを通して得た学び、経験を、次の世代にどのように伝えたいですか？

オリンピック・パラリンピックは、世界各国から選手たちが集まって、障がいのある・なし、得意・不得意などいろいろな人がいる共生社会だと思っています。その共生社会について私自身が捉えられたことを小さい子どもたちにも同じように伝えていきたいです。例えばケガをしてしまった子がいたら、その子が一緒に遊べるようなスポーツをやってみないとか、どこかそういう意識に根付いてくれるものを伝えられ

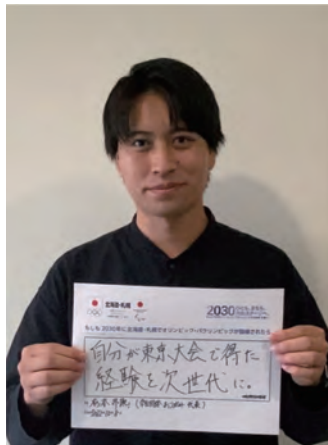
るようになりたいと思っています。

——自国でオリンピック・パラリンピックが開催されることの意義、また北海道・札幌 2030 大会への期待は？

すごくシンプルですが、自国で開催されるということはすごく身近にオリンピック・パラリンピックを感じることができることかなと思っています。やはりオリパラをやっているとテレビなどで応援したくなると思うのですが、自国開催だからこそ選手の活躍や大会によって変化する社会を身近に感じられる。それが一番の自国開催の良さかなと思います。また、大会を通じて私たちのような団体であったり、選手たちに対してアプローチしたい、こういう社会になってほしいという思いからいろいろな活動が生まれていくことが、自国開催の意義、価値かなと思います。

——北海道・札幌 2030 大会が開催されたら、どのような活動・関わり方をしたいですか？

2030 年に自分がどうなっているのか全然想像がつかないですけど、私はスキーをやっているのでトップアスリートの競技を会場に行きたいというのが一つ、あります。また、東京 2020 大会での活動を通してパラスポーツや共生社会というワードが自分事として捉えられるように



すぎもと たかき

杉本昂熙さん（学生団体おりがみ）

なと思っています。

——オリンピック・パラリンピックを通して得た学び、経験を、次の世代にどのように伝えたいですか？

オリンピック・パラリンピックは時代や自分の経験の大きな転換点であり、いろいろなチャンスに関わることができるきっかけだと思います。僕も大学生になってオリンピック・パラリンピックを通してボランティアというものに会い、その魅力を知って、そこから僕の進路もボランティア方面に向きました。オリパラに何かの形で関われば、きっと自分の中で大きな変化が起きる可能性がある。そんなパワーを持っているのがオリンピック・パラリンピックだと思います。どういう関わり方があるか分からない人も、いったん関わってみて、ちょっと内部を探って

みるということをぜひやってほしいなと思います。

——自国でオリンピック・パラリンピックが開催されることの意義、また北海道・札幌 2030 大会への期待は？

手の届く範囲にオリンピック・パラリンピックがあること自体が素晴らしいこと。ちょっと行けば選手が練習していたり、ちょっと頑張ればオリパラに関わることができるかもしれないという距離の近さはすごく大事で良いところだなと思います。僕としても「大学生活中に何か大きなことがしたい」というふんわりした目標の手段としてオリパラが出てきてしまうくらいには距離感が近かったので、いろいろな選択肢にオリパラが入ることが、自国で開催することの大きなメリットかなと思います。

——北海道・札幌 2030 大会が開催されたら、どのような活動・関わり方をしたいですか？

2030 年にはもう学生ではないと思うのですが、東京 2020 大会を通して学生がオリンピック・パラリンピックを通して関わるのができる喜び、楽しさを知ることができたので、その制度や雰囲気、学生が関われるものを継承して札幌オリンピック・パラリンピックにつなげていきたい



北海道・札幌 2030 オリンピック・パラリンピック冬季競技大会招致の機運醸成活動に関する自治体・非営利団体用のガイドラインは「北海道・札幌 2030 オリンピック・パラリンピック冬季競技大会招致サイト」の「各種資料」ページをご参照ください。

URL : <https://winter-hokkaido-sapporo.jp/document/>

※: URL をクリックするとページへ飛べます。